

日本植民地におけるラジオを利用した日本語講座に関する研究の第一人者として

植民地を統制する「国語」教育

日本が朝鮮半島などを植民地とした時代、施策のひとつとして「国語」(日本語)教育がありました。地域ごとに編集した教材で、日本語の授業を現地の子どもたちに受けさせていたのです。また「国語」(日本語)教育にラジオを使っていた記録もあります。当時ラジオは高級品で、一部の人が所有していなかったにもかかわらず、何をねらって放送を利用した日本語の教育を行っていたのでしょうか。

上田先生はアジアにおけるラジオの「国語講座」、中でも朝鮮半島における「国語講座」の研究に関しては第一人者です。

「朝鮮にラジオが登場したのは、内地に遅れること約2年、1927年のことであった。ラジオ語学講座の

歴史はラジオ放送の歴史とほぼ一致しており、その中で「国語講座」がどのように展開したのかに興味を抱いた。

当時のラジオ年鑑を調べてみると、朝鮮に限らず、満州、台湾、シンガポール、中国(大陸)でも「国語」や「日語」*注講座が放送されていることが分かった。また、南方占領地向けのテキストが放送博物館に所蔵されていることも分かった。当時のラジオプログラム欄の掲載されている新聞資料も手もとにあり、プログラム欄を二日ずつ確認していく作業を開始した(2000年11月)。ラジオプログラム欄の全時日の確認作業は、現在でも完了していない状況である(2005年1月)。(上田先生のホームページから引用)

先生は時間を見つけては韓国や日本各地に出向いて、当時の教科書

ながらアジア・中近東の代表者会議のようでした。

先生は絵カードや日本語の書かれたカードを使い、難しい日本語のニュアンスの違いなどを身振り手振りを加えて教えていました。

戦時中の「国語」(日本語)の教科書を見ると、内容は植民地化の進行とともに変化はしていますが、実に効果的に教えていることがわかります。日本語をほかの言葉(学習者の母語や媒介語)を使わずに教えるために、例えば最初は、相手が知りたい、あるいは身近な言葉から始め、だんだん抽象的な教えたい言葉を教え込んでいく、というような教育方法です。

「当時の教科書を作ったのは、いわば私の同業者です。この時代に生きた教師の受けた政治的な理由による制限、不自由さにもどかしさを感じるようになっていきます」

先人の実績を今に活かす

上田先生は、徳大の本部棟南側に昨年オープンした、日亜会館二階の留学生センターで、日本語教育の担当をされています。ここには県下の大学で学ぶ予定の留学生が日本語の勉強にやっています。学生もいれば母国での現役の教師や研究者もいます。徳島の大学で勉強を始めるにあたり、半年間の集中授業で、最低限生活に必要な日本語を話せるように教えています。

取材の日も、エジプト、バングラデシュ、タイ、ミャンマー、ラオス、インドネシア、フィリピン、ベネズエラ、中国からの留学生が勉強していて、さ



集の依頼と共有化を図っています。今、日本で学んでいる留学生の大半は、過去、「国語」(日本語)が強制された地域からやってきているのです。学生の顔を見るたびに、当時の日本の支配下で「国語」(日本語)を強制された人々の苦痛を考えます。

そして戦争の統制下で苦勞した当時の研究者や教育者を思いながらも、そこで試行錯誤して積み重ねられてきた研究を、現代に活かして、言葉が平和のために、良い「コミュニケーション」のために使われることを願って研究を続けています。

プロフィール

プロフィール

- 1969年 山口県防府市生まれ
- 1992年 愛知教育大学教育学部総合科学課程 日本語教育コース卒業
- 1995年 富山大学大学院人文科学研究科修士課程修了
- 2000年 広島大学大学院社会科学研究科博士課程 後期修了「博士(学術)」
- 1996年～1997年 大韓民国 啓明大学校国際学・通商学大学日本学科客員専任講師
- 2000年 県立広島女子大学国際文化学部助手
- 2002年 徳島大学留学生センター助教授
- 2006年 大韓民国 釜山大学校日本研究所客員研究員兼任 現在に至る

HP <http://homepage3.nifty.com/TAKA730/menu.htm>

